

国際規格の FD 海外研修報告

研修者：宮尾正樹（文化科学系教授）

研修先：英国・ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）

研修期間：2009年9月13日～16日（旅行期間：9月12日～19日）

研修目的：SOASの教育研究システムに関する情報収集及び教員との交流・協議

1. ロンドン大学 SOAS について

ロンドン大学（University of London）は1836年設立、2009年4月現在、19のカレッジと12の研究機関が所属し、所属カレッジの合計学生数が10万人を超えるイギリス最大の大学である。SOASは1916年設立、アジア、アフリカ、中東の言語、文化、経済、法律、政治研究の世界的中心であり、世界特にアジア・アフリカ地域の元首をはじめとする多くの政財界人（マレーシア国王 Sultan Salahuddin、ノルウェイ王女 Metti-Marit、ノーベル平和賞受賞者アウン・サン・スーチー女史、ガーナ大統領 John Atta Mills など）が学び、国際的ネットワークを結ぶ場となっている。英国内の研究機関としての評価の一つとして、Research Assessment Exercise 2008では、アジア研究で第1位、文化人類学で第2位に上げられた。各種の大学ランキングでも常に上位に位置し、2009年は、QS World University Rankings では人文科学系で、世界の44位、英国の7位、国内ランキングでは、Times Good University Guide で24位、Guardian University Guide で8位、Independent University League Table では15位となっている。

SOASはFaculty of Law and Social Sciences、Faculty of Arts and Humanities、Faculty of Languages and Culturesの3学部と40以上の研究所からなり、正規学生の40%以上が留学生で、出身国は100以上に上る。教員一人あたりの学生数が10.5人と、英国では最も少ない部類に属する。

2. 研修の報告

研修は、1) 9月13日、言語学科長 Peter Sels 教授、Noriko Iwasaki 講師他2名から、SOAS及び言語学科に関する情報収集、2) 9月14日、Endangered Language Programの責任者 David Nathan 氏から、プログラムについての説明、3) 9月14日、Noriko Iwasaki 講師と、本学からSOASへの学生派遣の可能性について相談、4) 9月16日、言語学科長 Peter Sels 教授から、SOASの学部及び大学院教育についての説明、5) 9月16日、Japan and Korea 学科の Kazumi Tanaka 講師から、日本語教育の現状、SOASから日本への学生派遣状況についての説明、6) China and Inner Asia 学科の Michel Hockx 教授から、学部及び大学院教育についての説明、7) Center for Excellence in Teaching and Learning のセンター長、Itesh Sachedev 教授から、SOASにおける第二言語教育についての説明と、本学学生の日本語教育インターンシップの可能性についての相談、からなる。その結果、以下に述べる3項目について、本学の教育研究改善の可能性を強く感じ

た。

2. 1. 第二言語教育における、ダブル・ディグリーの可能性

現在、SOAS においては、1 年間で修士号を取得させる特色ある修士課程教育を行っている。通常の Research Degree に対して、Taught Degree と呼ばれる。名称は修士論文を書かずに修了させる印象を与えるが、修士論文の執筆も組み込まれている。SOAS の学年は 10 月から始まる。日本の大学とちょうど半年違っており、それを利用して、2 年間の学習研究により、本学と SOAS の双方で学位を取得させることが可能ではないかと思われる。

日本の大学一般に、個別領域の教育研究に強く、一般理論に弱いという傾向がある。それに対して、SOAS の言語学科では、第二言語教育の一般理論と方法論を本格的に学ぶことができる。双方の長所を生かして、例えば日本語教育を研究しようとする学生が本学博士前期課程に入学後、半年間日本語教育研究の基礎を学び、研究の方向性を定めた後に留学し、SOAS で第二言語教育の理論を学び、学位を取得、さらに修士論文のためのデータ収集を行い、帰国後、日本語教育に関する修士論文を執筆し、学位を取得するというように、2 年間で二つの大学の学位を取得することが可能である。

SOAS 側ではそのような学生を受け入れることは可能だということであった。

実現のために解決しなければならない課題もいくつかある。まず、学生の英語力の問題である。残念ながら、本学学生の多くは SOAS で正規の授業を受けるための英語力を有しているとは言えない。計画的に（できれば学部段階から）大学で学習研究を行う英語力 (English for Academic Purpose) を身につけるシステムを構築する必要がある。

また、本学における博士前期課程教育のカリキュラムも再考する必要がある。入学後、早期に修士論文の方向性、さらには後期課程での研究の方向性を定めるような仕組みが必要である。

その他、学費や宿舍、生活費の問題、SOAS における学修に対する本学の単位認定の問題等もクリアすべき課題であるが、実現すれば、国際的に通用する能力と学位を身につけ、世界で活躍する教育研究者を養成することができるであろう。

2. 2. 本学学生の日本語教育インターンシップの可能性

日本語教育コースの博士後期課程学生が、教育スキルを磨きながら、研究に必要なデータを収集するために、SOAS でインターンシップを行う。日本・朝鮮学科との話し合いでは受け入れの可能性はあまり感じられなかったが、CETL 及び Language Center での受け入れについては、可能性が大きいと感じた。

英国における日本語教育の需要は決して減っておらず、日本・朝鮮学科の正規学生の他、CETL による Language of the Wider World 及び Language Center でも多くの人々が日本語を学習している。本学学生が SOAS における日本語教育に寄与する可能性は高

いが、学生にとっても、本学への留学生がアジア諸国中心である現状からして、欧米圏の学習者のデータを収集する貴重な機会となることであろう。

2. 3. 外国研究分野における学生の海外派遣について

SOAS では、学部教育において、対象とする国・地域への 1 年間の留学を義務づけている。中国・内アジア学科では 2 年次、日本・朝鮮学科では 3 年次に行っている。実施の仕方は教育カリキュラムや対象国の事情によって異なる。中国の場合は、全員が北京師範大学に留学するが、日本の場合には、複数の大学に数人ずつ留学する。本学でも SOAS の日本研究の学生を受け入れている。

本学で外国を対象とした研究・教育を行っているのは、言語文化学科の中国語圏言語文化コース、英語圏言語文化コース、仏語圏言語文化コースであり、その他、人文科学科の比較歴史コースの外国史研究の学生などもある。外国研究においては、対象国・地域の言語を操れることは研究の前提条件であり（我が国ではこれまで必ずしもそうは認識されてこなかった）、長期間対象国・地域に滞在することが言語運用能力の向上に大きく寄与することは当然である。また、留学先にもよるが、留学中に培った人脈は、将来どの分野においても、国際的に活躍するための大きな糧となる。本学学生の海外留学に対する関心も高い。

本学のカリキュラムは相当に複雑であり、1 年間の留学制度を短期間に実現することは容易ではないかもしれないが、たとえ半年間でも実現できれば、学習面だけではなく、より広いエンパワーメントにつながるものと思われる。

以上、より一層の連携の可能性と、SOAS の教育制度に触発を受けた本学の教育改善の可能性を強く感ずることができた研修であった。学内での検討・実現に向けて関係諸部門に働きかけていきたい。



写真：ロンドン大学東洋アフリカ研究学院にて